新見公立大学紀要　第32巻
pp.205-210，2011

報　告

開発途上国との国際交流から得た学生の学び

― 2010年度カンボジア・スタディツアー報告 ―

中山　亜弓*・木下　照子[1)]・谷野　宏美[1)]・明石　俊子[2)]

国際活動

（2011年11月22日受理）

新見公立大学・短期大学カンボジア会の活動として，「カンボジア・スタディツアー」を2010年度も実施した。ツアーの内容としては，NGO 団体が運営する支援村等を訪問し，開発途上国の生活環境に触れること，小児病院・州立病院や，地雷障害者等に義肢を提供している施設を訪問し，医療の現状を知ることである。そこで，カンボジアの医療の現状知り，今の自分ができる国際支援・ボランティアとは何か，を課題にツアーを行い，学生とともに考えたので報告する。

（キーワード）発展途上国，国際交流，学生

はじめに

2010年度より新見公立大学が開校され，新たな科目として「国際交流活動」が加わった。その目的は，国内外での国際交流体験を通して，様々な国の文化や歴史，医療状況などを学び，多様な価値観への柔軟な思考を養うとしている。活動内容に，カンボジア会も含まれており，年間の活動やスタディツアー参加とその報告レポートによって，単位取得もできるようになった。

カンボジアは，1970年代のポル・ポト政権による知識階級の大量虐殺や，その後の20年にわたる内戦によって，この国の医療システムは崩壊してしまった。政府は医師や看護師の育成に力を入れているが，指導する人材や臨床実習などの教育施設が不足しているため，医療水準は依然低いままである。そして，カンボジアの子どもの死亡率はアジアで最も高く，乳児死亡率は2009年68/1000（日本は２/1000）[1)]である。下痢や栄養失調など，予防できる病気で亡くなることも少なくない。また，子どもが病気になってもすぐ病院には行かず，医師の指示のない売薬を使用したり，民間療法などに頼るため，手遅れになり助かるはずの命が失われているのが現状である。

新見公立大学・短期大学カンボジア会の活動である，「カンボジア・スタディツアー（以下，ツアーと略す）」を2010年度も実施した。ツアーの内容は，①医療の現状を知るため，日本人看護師が働いているアンコール小児病院および州立病院や，地雷障害者等に義肢を提供している HI（Handicap International）の訪問，②発展途上国の生活環境に触れ，現地の人々との交流を目的に，岡山県に本部を置く NGO 団体が運営する地雷障害者支援センターおよび自立村の訪問，③カンボジアの文化を知るため，アンコール遺跡群の観光である。今回のツアーでは，カンボジアの医療の現状知り，今の自分ができる国際支援・ボランティアとは何かを課題にして実施したので報告する。

Ⅰ．新見公立大学・短期大学カンボジア会の目的

この会は，教員を中心として発足したものである。学生への目的は，「世界に目を向け，国際的視野で考える知識と態度を身につける」「人間を対象とした専門職者に携わるための教養と感性を養う」である。

Ⅱ．主な活動内容

１．学内活動

カンボジア会では，スタディツアーに向け，学内での勉強を月１回実施している（表１）。内容は，国際貢献・国際協力に関するもの，カンボジアの歴史や文化に関するものなどの勉強会，実際に現地で活動されている日本人ボランティアの方の講演や日本に留学中のカンボジア人高校生との交流会など，現地研修での学びをより効果的にするための活動を行っている。また，スタディツアー前には，現地の子どもたちと交流するために，レクリエーションや日本や新見の紹介をするための準備も行っている。

*連絡先：中山亜弓　新見公立短期大学　看護学科　718-8585　新見市西方1263-2
１）新見公立大学看護学部　２）玉野総合医療専門学校　保健看護学科

表１　2010年度学内活動

	学　　生	目　　的
４月	メンバー募集	新たなメンバーを募る
５月	学園祭参加（展示） カンボジア・スタディツアー報告会	学内・外に向けて，学びを伝える
６月	勉強会「VTR 上映会」	発展途上国の現状を学ぶ
７月	勉強会「ボランティアについて」	国際協力の仕組みを学ぶ
８・９月	夏休み	自分たちにできることを考える
10月	勉強会「カンボジア留学生との交流」 カンボジア研修募集説明会(教員より)	ツアー教員参加者募集
11月	勉強会「NGO・NPO について」 カンボジア研修説明会(旅行業者より) 研修参加申し込み締め切り（11月末）	何が必要とされているか考える ツアー参加者の決定
12月	現地活動準備・リハーサル 研修最終確認	現地の子どもたちと交流する方法を考える
１月	カンボジア・スタディツアー スタディツアーレポート提出(１月末)	実践する，体験する 自分たちにできることを考える
２月	スタディツアー研修報告会 スタディツアー・ポスター作成	学びを共有する・まとめる 次年度の活動に向けて，考える
３月	ミニ学会にてポスター展示	学びを伝える

表２　2010年度カンボジア・スタディツアー　スケジュール

日	月　日	都市名	行　　程
1	2011年 １月５日 （水）	関西空港発 ハノイ着 ハノイ発 シェムリアップ着	08：30　関西空港集合 関西空港よりハノイへ　【所要５時間35分】 ハノイよりシェムリアップへ　【所要１時間45分】 到着後，入国審査。 **【シェムリアップ泊】**
2	活動１日目 ６日 （木）	シェムリアップ	午前：● **ＨＩＢ訪問** ● **キリング・フィールド見学** ● **トンレサップ湖見学** 午後：● **アンコール小児病院ビジターセンター訪問** ● **シェムリアップ州立病院訪問** **【シェムリアップ泊】**
3	活動２日目 ７日 （金）	シェムリアップ	午前：● **ＣＶＳＧ地雷障害者支援センター視察** ● **アキラ地雷博物館見学** 午後：● **ＣＶＳ自立村の小学校訪問，子どもたちと交流** ● カンボジア最大の **ジャックフルーツ園（開墾中）で植樹作業** **【シェムリアップ泊】**
4	活動３日目 ８日 （土）	シェムリアップ発 ホーチミン着	終日：● **シェムリアップ市内見学** **①アンコールトム，②タ・プロム見学** **③アンコールワット見学，④市場見学** シェムリアップよりホーチミンへ　【所要１時間00分】 **【機中泊】**
5	９日 （日）	ホーチミン発 関西空港着	ホーチミンより関西空港へ　【所要４時間45分】 到着後，入国手続きを終え，解散。

２.「2010年度カンボジア・スタディツアー」研修報告（表２）

１）研修期間

2011年１月５日から９日の５日間（現地活動期間は３日

間）

２）研修先

カンボジア　シェムリアップ州

３）参加人数

学生　12名（大学看護学部１年生10名，短期大学看護学科２年生２名）

教員　３名（うち１名他学教員）

４）研修内容

⑴　HI 施設訪問

HI は，地雷障害者と小児ポリオ障害児に義肢を提供・交換し，使用方法等の訓練を目的に活動している。1995年に設立された団体で，昨年までエキスパートのベルギー人，ドイツ人の２人と，他のスタッフはカンボジア人（政府スタッフと民間スタッフに分かれている）の計36名で運営されていた。しかし，2011年１月１日より政府管轄になり，スタッフはカンボジア人５・６名と，家事スタッフ数名に減っていた。このスタッフは，義肢を作るチームと，地雷障害者を探すチームに分かれている。主な活動として，郊外へ出向き，地雷障害者やポリオの人々を探し，施設にて義肢を作り，自立した生活ができるよう，リハビリを行っている。施設利用者は，義肢作成費および生活費の支援を政府より受けることができ，個人負担はない。また，農業をしている人々は，雨期になると仕事が少なくなるため，この時期を利用して来所するとのことであった。

施設のスタッフが少なく，実務で忙しいため，詳しい説明を受けることができなかったが，リハビリを行っている場面や，四肢の採寸を行っている場面を見ることができた。

⑵　アンコール小児病院訪問

アンコール小児病院は，NPO 法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーの最初のプロジェクトとして，カンボジアの子どもたちの病気診療・治療をするために1999年に建設された。この法人は，アジアの恵まれない子供たちの支援を目的としている。また，アンコール小児病院では，現地医療スタッフなどによる医療診療・運営活動ができるように，その教育の場としての医療教育センターの役割も担っており，現地の人々への医療，衛生教育に寄与することも目的としている。

学生は病院施設内にて，アンコール小児病院の活動についてのビデオを鑑賞した。アンコール小児病院には１日350～500人以上の患者が外来を訪れており，問診によってトリアージされ，３割程度は診療が不要である。症例は，呼吸器系（上気道炎，気管支炎，重症化すると肺炎），感染症（下痢，赤痢，腸寄生虫による感染，マラリアなど）が特に多く，交通事故，火傷，栄養失調もある。訪問した午後の時間帯でも，病院の敷地内には待っている子どもやその家族が溢れ，診察の順番を待っている状況であった。また地域医療支援として，病院受診が難しい農村部への地域巡回診療・保健教育活動をしている。この活動では，衛生，栄養，妊婦指導などを継続的に行っているが，一般市民にそれらの知識がないことから病気は減ることはなく，保健・衛生の観念が浸透していないことが課題となっている。

そして，この病院で看護師として働いている赤尾和美氏に今年も会うことができた。学内活動でも，赤尾氏のことを紹介していたため，学生は会えるのを楽しみにしていた。短時間ではあったが，赤尾氏から直接話を聞かせていただき，学生も多くの学びがあった。

⑶　シェムリアップ州立病院訪問

シェムリアップ州立病院は，毎月約4,000名が受診し，約

写真１　アンコール小児病院

写真２　赤尾和美氏（下段左から３人目）と

1,000名が入院する，国立に次いで施設設備が整った総合病院である。疾患としては，マラリアや心臓病が最も多く，糖尿病，HIV 感染，結核，高血圧も多いとのことである。平均在院日数は４日程度で，病院に来るまでに重症化していることも少なくないようである。また，出産についても，５日程度で退院し，さらに問題がなければ入院期間が短縮される。入院費・治療費については，所得に応じて違いが

あり，約70％の患者は必要経費が払えないため，政府とベルギーの支援によって，治療が受けられる。病院に勤務している医師は約120名に対し，看護師は38名と少ない。訪問中に点滴管理をしていた看護師１名を見かけたのみだった。

⑷　NGO 支援施設訪問

NGO 支援施設である地雷障害者支援センターと自立村を訪問した。これらの施設は，ツアー初回から訪問している。

まず，センターにて，学生はスタッフから NGO が行っている支援や，施設での生活など話を聞いた。その後，自立村へ移動し，小学校を訪問した。当日は祝日のため，学校は休みであったが，約40人の小学生と村の人々が集まってくださり，学生と現地の子どもたちの交流を行った。日本の四季の紹介ポスター発表とゲーム，そして個々に子どもたちと触れ合った。

次に，自立村にて，ジャックフルーツ園開墾作業を行った。その畑を今後，水遣りなどで管理をする家族と一緒に穴を掘り，苗を植えた。畑の土はとても固く，掘り起こすのが困難だったが，畑仕事をやったことのない学生は一生懸命行っていた。このジャックフルーツの実はとても高価なもので，収入源の助けになるとのことだった。

写真３　自立村小学校にてポスター発表（日本の四季について）

Ⅲ．学生の学びと私たちができる国際支援

スタディツアー終了後，学生にはレポート作成を課題としている。内容は，①カンボジアに行って良かったところ，②カンボジアに行って感じる日本のこと，③今の自分ができる国際支援・ボランティアについてである。以下，抜粋して紹介する。

写真４　小学生との交流

写真５　ジャックフルーツ園開墾作業

１．学生Ａ

今回のカンボジア・スタディツアーで国際支援はどこまでするのがよいのかわからなくなった。NGO の方は教育が大事だと言っていた。私もカンボジアの人たち自身で発展していけるようになればよいと思う。私はカンボジアの町並みはとても気に入っている。あの町並みが高層ビルばかりになってしまうのは嫌だ。だからどこまで支援してよいというのは難しい問題だと思った。今の自分にできることと言えば，募金などかと思うが，今回カンボジアに行って感じたカンボジアの実態や，良いところ，自分が感じたことなどを知らない人に伝えることもひとつの支援になりえるのではないかと思う。

２．学生Ｂ

私はカンボジアに行くまで自分ができる支援といえば募金することくらいなのかなと思っていた。しかし実際にカンボジアに行き，さまざまな人の話を聞くうちにただお金をあげるだけでは意味がないと知った。もちろんお金をあ

げることで物が買えて生きるための足しになるかもしれない。ただそれによってカンボジアの人は働いてお金をもらうことをしなくなり，外国人に物乞いをして暮らすようになってしまうのである。これでは支援と言えなくなり，カンボジアの発展には繋がらないだろう。そこで私たちがやるべきことは自立を促すような支援だと思う。例えば今回のカンボジア・スタディーツアーでのジャックフルーツの植樹作業のようにカンボジアに住む人たちの未来のためのボランティア活動に参加することである。私たちは支援していく上で未来につながるような活動を積極的に行うべきだと思った。

３．学生Ｃ

NGO 支援施設に行った時に，現地でスタッフとして働く人から聞いた話で「現在，カンボジア人の支援慣れが問題となっている。」と聞いた。これは，観光客の態度にも大いなる問題があり，支援機関だけの問題ではない。カンボジアには多くの物乞いがいて，その多くは，手に職を持っていないためにその現状となっている。ここで問題となってくるのは彼らがなぜ手に職を持てないかということだ。地雷被害や HIV 感染などで就業困難な場合もあるが，「物乞いで食べていける」という意識を持つ人が多いことも事実である。現に物乞いをして得たお金で立派な家を建てた人もいる。確かに援助をしなければカンボジアの人の力だけではまだ頼り無い部分も多くある。これから私達ができることは観光者に対して，きちんとした態度を伝えていくことではないだろうか。ボロボロの服でやせ細った子どもに「お金ちょうだい」と言われたらつい，１ドル２ドル渡してしまいたくなる。しかしその１ドルの持つ価値がカンボジアではとても大きく，彼らの正しく働く意欲を失わせてしまうことからきちんと理解しておかなければならないと思う。また，働く意欲はあってもなかなか職を持つことができない人に対する職業訓練を行えるような自立支援を行うことが今後の課題だと思う。それからこれからの時代を担うこととなる子どもの教育にも力を入れねばならないだろう。このようなこれからの課題に対し正しく，公平に物資を活用してくれる，信頼のおける機関への寄付活動を積極的に行うことも，大学生として今の自分に可能な支援だと思う。「必要な物資を必要な分だけ」を忘れないように，手を出しすぎないように，カンボジアの成長を応援しつつ，見守っていきたいと思う。

４．学生Ｄ

地雷障害者自立支援センターで案内してくださった，NGO のスタッフが「日本人は支援しすぎて，カンボジア人は支援慣れしている。だから，働かずに観光客からお金を騙し取ったりする。」とおっしゃっていた。カンボジアを支援したいが，カンボジア人の自立を阻止してしまうことにならないように，支援のしすぎは逆効果だということを知った。カンボジアに行くにあたって，家族や友達も「そんな危険なところ大丈夫？」とあまり良いイメージを受けていなかったため，私が実際に行って感じたことをみんなに伝えたら，イメージも変わってくると思う。想像と実際に行ってみての違いを伝えることが，今自分にできることだ。支援といっても，簡単にできることではない。しかし，カンボジアのことをみんなに伝えることはすぐにでも出来る。伝えることが，国際支援・ボランティアに繋がってほしい。

５．学生Ｅ

カンボジアではなぜ，そんなにゴミがあちこちに落ちているのか，ジャックフルーツの植樹をした時にわかった。植える苗木には，根の部分にビニールのポットがついていて，植える時にはそれを外して植える。苗木を植えた後，その外したポットを拾い集めようとしたら，一緒にいた現地の男の子が，それを取って畑に捨てた。それを止める意味で拾うと，首を振ってまた捨てた。カンボジアでは，ゴミはゴミ箱に捨てるという習慣がないのだとわかった。生ゴミなど自然にかえるのならば良いのだけれど，人間が人工的に作り出したプラスチックやビニールなどは環境をどんどん悪化させる。日本人も，たばこのポイ捨てや不法投棄など許せない捨て方はたくさんしている。だから，指導なんて立場には立てない。けれど，カンボジアの人々には豊かな自然を守っていってもらいたいし，自分の住むところをもっと大切にしてもらいたい。

この問題は，国民の意識を変えなければ解決しない。私が微力ながらできることとしては，まずカンボジアのゴミ事情について詳しく知るということ。次の段階として，現地に行くことができればゴミ拾いを手伝う，そしてカンボジアの人たちにゴミはゴミ箱に捨てるということを伝えるということである。カンボジアにはもっと美しい場所であってほしいし，そうなってもらえることを願う。

Ⅳ．まとめ

今回のツアー研修では，施設見学と現地の人々との交流が主な内容であった。しかし，学生の感想レポートから，多くの学びが得られていたことが感じられた。学生がカンボジアの医療や生活の現状を実際に見て，感じることで，学生自身が発展途上国について，各々イメージしていたこととのギャップがあることや，日本との違いに気付けた。そして，今の自分に何ができるのか，学生自身が考えることができたと思う。例えば，発展途上国のことを知っておくと，支援する側の「自己満足」や「押しつけ」にならない方法を考えて支援することができる。さらに，それら感じたこと・考えたことを周囲へ伝えようとしている。伝える場として，大学のイベント等でのポスター展示・発表をしており，学内外へ発信し続けている。その一方で，今は何もできることがない自分にも気づけており，今後どんな看護師になりたいのか考える材料にしてほしいと思う。

大学看護学部の科目「国際交流活動」の一つとして，4年間を通じて学生個人が活動する機会を持つことができる。短大では，1年ごとに学生メンバーが変わるため，1年間の活動内容やスタディツアーの内容が毎年同じになってしまっていた。しかし，今後は前年に参加した学生も継続して活動に参加することが可能になるため，活動内容も学生主体でカンボジア会が運営できるよう，活動計画の内容を見直す必要がある。

文献

1）日本ユニセフ協会・ライブラリー　世界子供白書（アクセス）http://www.unicef.or.jp/library/toukei_2011/m_dat01.pdf

2）岡本亜紀，岡　宏美，杉本幸枝，矢藤誠慈郎，難波正義：学生の国際的ボランティア活動の育成を目指して ― カンボジア研修報告 ―，新見公立短期大学紀要，27，187-197，2006.

3）岡本亜紀，岡　宏美，杉本幸枝，岡本直行：学生ができる国際貢献 ― 2006年度カンボジア研修報告 ―，新見公立短期大学紀要，28，183-189，2007.

4）岡　宏美，岡本直行，杉本幸枝，岡本亜紀，矢藤誠慈郎，古城幸子：開発途上国との国際交流から得た学生の学び ― カンボジア・スタディツアーの教育効果 ―，新見公立短期大学紀要，29，75-80，2008.

5）永尾理恵，小見山幸乃，寶田真美子，岡　宏美，古城幸子，川崎泰子：カンボジアの訪問診療の実際と看護学生の国際貢献～農村地域での日本NGOによる健康支援活動に同行して～，インターナショナル，2009.

6）小見山幸乃，永尾理恵，寶田真美子，岡　宏美，古城幸子，川崎泰子：カンボジアNGO施設で暮らす子どもと看護学生の国際交流体験，インターナショナル，2009.

7）岡　宏美，古城幸子，川崎泰子：学生が行うカンボジアでの現地活動の新たな試み ― 2008年度カンボジア研修報告 ―，新見公立短期大学紀要，30，121-125，2009.

8）中山亜弓，谷野宏美，内藤一郎，藤田小矢香：国際交流から得た学生の学び．新見公立大学紀要，31，199-203，2010.